

## ムアウッドの『森フォレ』のなかのラシーヌの引用 — 家族の系譜に宿る戦争

萩原芳子

新しくできた「研究の広場」をお借りして、17世紀演劇プロパーから少しはずれて、現代作品におけるラシーヌについて考察させていただこうと思う。受容の研究というよりは、抱いたひとつの疑問を自分で掘り下げてみようという試みである。対象の作品は日本でも2021年7月に世田谷パブリック・シアターで藤井慎太郎訳、上村聡史の演出で上演されたワジディ・ムアウッドの*Forêts*『森フォレ』<sup>(1)</sup>である。その冒頭に近い場面でラシーヌの『イフィジェニー』の長ぜりふの一部が朗読される。それがどういう意味を持つのか、ムアウッドとラシーヌの接点はどういうところにあるのか、という疑問からの出発である。

ワジディ・ムアウッドはレバノン生まれでカナダ国籍も持つ劇作家、小説家、演出家、役者、劇団の座長と多くの顔を持つアーティストである。2016年からはパリのラ・コリヌ国立劇場の芸術監督も務めている。1978年に、10歳のとき戦火を逃れてフランス、そしてカナダに移住した避難民という経歴を持っている。100万人の避難民を生んだと言われるレバノン戦争はムアウッドの多くの作品にいろいろな姿で中心的あるいは原初的な位置を占める。一方でギリシア悲劇に対する関心は深く、映画化もされている代表作の*Incendies*『炎 アンサンディ』(2003年)<sup>(2)</sup>はレバノン戦争を背景としながら、オイディプス神話との類似がしばしば指摘される筋書きである。他の作品も、現代を舞台としながらも、親子の因縁や兄弟の絆と反発が主題となることが多い。2008年にはオイディプスの祖先にさかのぼって代々繰り返される戦争と過ちの神話を*Le Soleil ni la mort ne peuvent se regarder en face*『太陽も死も直視はできない』という劇作品に収めている<sup>(3)</sup>。さらに演出家としても2011年から2016年にかけてソフォクレスの現存する7作品すべてを演出している。

戦争、そしてギリシア悲劇から受け継ぐ肉親の愛憎劇はラシーヌの作品においても中心的なテーマである。ギリシア悲劇に直接着想を得た劇としては、処女作の『ラ・テバイッド』(1663年)はエディップ(オイディプス)の双子の息子ポリニスとエテオクルの確執による戦争を描き、アイスキュロスの『テーバイ攻めの七将』から題材を得ている。その後もトロイア戦争後にアキレウスの子、ピリュスに捕虜としてエピール(エペイロス)に連れてこられたトロイアの王妃『アンドロマック』

(1) Wajdi Mouawad, *Forêts*, Leméac/Actes Sud-Papiers, 2006, 2009.

邦訳 藤井慎太郎, 『悲劇喜劇』 No 811, 2021年7月, pp. 73-135.

(2) *Incendies*, Leméac/Actes Sud-Papiers, 2003, 2009.

(3) *Le Soleil ni la mort ne peuvent se regarder en face*, Leméac /Actes Sud-Papiers, 2008.

(1668年)、トロイア遠征を前に神々への生贄となることを宣告されるアガメムノン王の娘『イフィジェニー』(1674年)、そしてテゼーの息子イポリットに恋をするアテネの王妃『フェードル』(1675年)の悲劇。この最後の劇も示すように、ラシーヌにはとくに『アンドロマック』以降、劇の力学に大きく作用する抗いがたい恋のテーマがもう一つの特徴をなす。

### 『イフィジェニー』の引用

*Forêts* 『森 フォレ』(2006, 2009年)は1999年から2009年にかけて執筆された4部作 *Le Sang des Promesses* 『約束の血』の3作目である。現代のカナダから複雑な付箋を紡ぎ合わせながら第一次大戦時のフランスのアルデンヌ地方にさかのぼり、主人公の系譜を辿る壮大でファンタスティックなおディッセーである。

ラシーヌの引用が出てくるのは戯曲の最初の幕に当たる *Le cerveau d'Aimée* 「エメの脳」のなかの「神託」と題する最初の場面である。場面は一風変わった「記念日」の祝いの席。エメとバティストはこれから生まれてくる待望の子の鼓動を病院で始めて確認できたこの日を、友人たちとともに祝おうというのである。11月9日。一人の客は、この日付はドイツでのユダヤ人迫害が始まった水晶の夜、そしてベルリンの壁の崩壊の記念日と重なりと指摘する。すると、別の友人が「これでは悲劇役者になるしかないなあ」「クリテムネストルになるにちがいない！」と応じる。この最後の男性客はラシーヌの『イフィジェニー』のクリテムネストル役を演じている役者だと言う。「家族の暗い話だ。アガメムノンはギリシア軍の船団がトロイアに辿りつけるよう娘イフィジェニーを生贄にしようとしている。神託がそう命じたのだ。」と説明し、バティストをアガメムノン王に仕立てて、朗誦する：

#### Clytemnestre

Vous ne démentez point une race funeste ;  
Où, vous êtes le sang d'Atrée et de Thyeste :  
Bourreau de votre fille, il ne vous reste enfin  
Que d'en faire à sa mère un horrible festin.  
Barbare ! c'est donc là cet heureux sacrifice  
Que vos soins préparaient avec tant d'artifice !  
Quoi ! l'horreur de souscrire à cet ordre inhumain  
N'a pas, en le traçant, arrêté votre main !  
Pourquoi feindre à nos yeux une fausse tristesse ?

#### クリテムネストル

忌まわしい血筋に違うことはなく、  
そう、あなたはアトレとティエストの血を受け  
継がれている。  
娘の死刑執行人になった挙句に、あとは  
母親へのおぞましい宴に供するのでしょうか。  
残忍なお方よ！あれほど入念に用意なされた  
めでたい供儀<sup>(4)</sup>とはこのことだったのですか。  
なんと、この非人間的な掟に署名する恐ろしさに  
筆を握るその手は止まらなかったのですか。  
なぜ私たちに心にもない悲しみを装うのですか。

(4) クリテムネストルたちはイフィジェニーの結婚を祝う供儀で動物が生贄にされると誤解するよう、周囲は曖昧な言動をしていた。

Pensez-vous par des pleurs prouver votre  
tendresse?  
Quel débris parle ici de votre résistance ?  
Quel champ couvert de morts me condamne au  
silence ?  
Un oracle fatal ordonne qu'elle expire !  
Un oracle dit-il tout ce qu'il semble dire ?  
Ni crainte, ni respect ne m'en peut détacher.  
De mes bras tout sanglants il faudra l'arracher.  
Aussi barbare époux qu'impitoyable père,  
Venez, si vous l'osez, la ravir à sa mère.

涙を流すことでご自分の愛情の証しになる  
とでもお考えでしょうか。  
抵抗されたことを物語る残骸はどこに。  
私を沈黙に追い込むほどの死者で埋め尽くされ  
た戦場はどこにあるのですか。  
不吉な神託が娘の死を命じたとは！  
神託を字義通りに受け取っていいのですか。  
恐れも配慮も私から娘を引き離せません。  
私の血まみれの腕からもぎ取るほかありません。  
残忍な夫にして、無慈悲な父親よ、  
さあ、母親からこの子を奪ってみるがよい。

カナダの友人同士の集まりの最中に、冒頭から歴史の影が差していたとはいえ、このラシーヌ劇の一節の朗読は一見唐突にもみえる。これで一気に神託と戦争、そしてアトレウス家の血に染まった神話、親子の複雑な因縁が劇に侵入してくる。これは、登場人物が役者で、たまたま演じている場面を朗読した付随的なエピソードなのか、観客は少し迷う。だが、この直後に主人公のエメは癲癇の発作を起こし、起き上がると以下の謎めいた「神託」を口にする。

父親はただひとりで息子は三人、  
それぞれに同じ数の娘がいて、真ん中に句切れがある。  
最後の娘は真昼に生まれ、真夜中に死す。  
斜めの神託、  
遠くから討つ神より。

斜めの神託 Oracle de l'Oblique は Apollon Loxias（斜めのアポロン）が下すデルポイの神託を指す。オイディプス神話に見られるように、「父を殺し、母をめとる」という予言の言葉は正しいのだが、人間が解釈を誤る斜めの、迂遠な言葉を吐く神託である。クリテムネストルの「神託は字義通りに受け取っていいのでしょうか。」につながる。

クリテムネストルのセリフはしたがって単なる登場人物の余興として登場するのではない。ムアウッドは『イフィジェニー』第4幕第4場の67行ある長ぜりふからその冒頭と最後の部分を中心に16行を抽出し、一族の系譜、親子の絆、そして神託というテーマに焦点を当てている。せりふはいわば、芝居の異次元への転換点として機能しているのである。神託の登場を予告し、謎解きがこの戯曲でひとつの道しるべになることを示唆する。ムアウッドの作品はしばしば謎解きのかたちを取る。『炎 アンサンディ』では母親の遺言が子供たちに謎を投げかけていた。そして、謎解きはしばしば予期せぬ事実を暴く。

クリテムネストルの登場にはしかしもうひとつの側面もある。クリテムネストルは娘の命を救おうとする母親である。1幕目に当たる「エメの脳」は、エメ Aimée の出産にいたるいきさつに焦点を当てる。エメの癲癇の発作以降、二つの時代の場面が交互に、呼応するように展開する。ひとつは生まれたエメの娘ルー Loup が16歳になっていて、亡くなった母親に託された願いにしたがって、古生物学者と喧嘩しながら家系を、まず自分の誕生から遡っていく場面。もうひとつは出産前の母親エメが脳神経外科の検査を受ける場面。娘と母親のそれぞれの場面は時代を隔てて、ルー誕生にいたるドラマを紡ぎ出していく。出産前のエメに脳腫瘍があることが判明するが、腫瘍の中央に骨のようなものがある。生検の結果、その骨のようなものは胎児だと言う。ルーを妊娠していると同時に脳にも胎児がいるのだ。脳内の胎児はエメの双生児で、母親の胎内で二人だったが、もう一方がエメの体内に入り込んで脳に入ってしまったという<sup>(5)</sup>。専門医は妊娠したまま癌の治療を進めれば命を縮めることになるかと堕胎を勧める。だが、中絶手術の前日、1989年の12月6日にモンリオールの理工科学校で事件が起きた。男が侵入し、男子学生と女子学生を分けたくて、女子学生だけを引き留め、銃を乱射し14人を殺害したのである。この衝撃でエメは「15番目を殺す」ことを断念する。クリテムネストルとは異なるかたちだが、自分の命にかけて娘の命を守ることにする。

このエメの決断と関連して、クリテムネストルのせりふにはもうひとつ注目すべき点がある。せりふは『イフィジェニー』の四幕四場に出てくる。クリテムネストルは娘が生贄になることを直前に知り、ギリシアの軍勢と国の論理に対して心からの叫びを發する。いわば男たちの論理にひとりの母親として抵抗するというクリテムネストルの決意の瞬間である。同時に、アガメムノンに対して、イフィジェニーを生贄にする決断は父親として本当に抗い、闘ったうえでの決断なのか、を問うている。その点、ラシーヌの戯曲ではアガメムノンは終始優柔不断で、いろいろな事態や感情に流される。イフィジェニーをまずは遠ざけようとし、ユリスの説得により供儀の容認に傾き、イフィジェニーに会って動揺し、イフィジェニーの婚約者アシルとの喧嘩で傷つき供儀の命令を下し、娘に命を助けるが結婚をご破算にするといいだす。最後まで迷える人物である。

これに対して、エメも冒頭では迷える人間である。ベルリンの壁の崩壊や水晶の夜など、そんな歴史の出来事は自分には無縁のものだとしていた。自分の意見もないのに、どう思うのかと聞いてくる周囲に苛立ちさえみせていた。医師に脳腫瘍があり、医学的には出産は命と引き換えになりかねないと言われ、夫の後押しもあり、母親の命を優先させるという常識に従うしかないかと観念していた。しかし中絶の前日、モンリオール理工科学校の事件の報道で殺された女子学生たち一人ひとりの名前が読み上げられていくのを聞いて、初めて出来事を全身で受け止めたのだ。抗議の声を上げるようにして、女の子を産むことを自分の使命だと感じ、自分で決断する。

ムアワッドは、自らの存在の啓示、自らの存在の根幹を成すものを認知する瞬間を芝居や小説でも重視する。Incendies『炎 アンサンディ』では子供たちは長い探求の旅のすえに自らの出自を発見

(5) ムアワッドは実際の出来事を基にすることが多く、この場合も寄生性双生児と呼ばれる現象で、双子の一方の胎児がもう一方の胃の中に寄生していた例や脳に発見された例もあるという。

する。それと同時に、子供の父親も自分の罪を悟る。ムアウッドはソフォクレスについて語るなかでこう話している。「芸術作品における心を揺さぶる経験とはこういうものです。なぜならソフォクレスは疑念を抱いているから、彼は私たちは複雑な世界に生きていると言い、その登場人物はすべて自らの存在の啓示に直面しているから、たとえそれで目がつぶれても、自分の息子を殺害したとしても。」「一人ひとりが自らが盲目であったことを知り、そのことで自分が何者であるかを悟る。この啓示の瞬間が私にとって、存在しうるもっとも深い経験なのです。」<sup>(6)</sup>

ラシーヌはアリストテレスの『詩学』を読んで、いくつか自ら翻訳した書き込みをしている。そのなかで *reconnaissance* 「認知」の概念に関連する部分がある。書き込みを研究した E. Vinaver はラシーヌが独自の解釈を行っていると指摘する。『詩学』では登場人物は「自らの行動（の犠牲者）を知っているか知らず」にいて、知らずにいた者はそれを認知するにいたることで悲劇において一番効果があるとしている。それに対して、ラシーヌは主人公が発見するのは犠牲者が「誰」なのかというアイデンティティの問題ではなく、主人公は「何をしようとしているのか」を知らずに行動し、「何をしたのかを認知するにいたる」<sup>(7)</sup> とする。エルミオーヌやフェードルなどが最後に自分の罪の深さをようやく受け止める瞬間、認知する瞬間につながる。ムアウッドの「自分がなにかを悟る」とは異なるが、自分に返ってくる認識という点で通じるし、両者ともに、アリストテレス同様、ソフォクレスが念頭にあると推測できる。

ムアウッドがエウリピデスのクリュタイムネストラを選ばなかった理由も、この点にあるのだろう。『アウリスのイピゲニア』ではクリュタイムネストラはアガメムノンの決意の過程を問うているのではなく、前夫を殺されても、この家に妻として尽くしてきたのに、娘がいなくなった家はどんなに辛いかと情に訴える。またトロイアから帰ってきた夫をどのように迎えられるのか、ヘレンの娘を生贄にするべきではないか、といった議論を行っている。ラシーヌは一部にエウリピデスを踏襲した議論も使っているが、ムアウッドはクリテムネストルの長ぜりふからそうした議論を省略している。

---

(6) Wajdi Mouawad, Hortense Archambault, Vincent Baudriller, *Voyage*, pour le Festival d'Avignon 2009. P.O.L. Festival d'Avignon. « C'est cela l'expérience du bouleversant devant l'œuvre d'art. Parce que Sophocle doute, parce qu'il dit que nous sommes devant un monde compliqué, parce que tous les personnages chez lui sont confrontés à la révélation de leur être, que cela leur crève les yeux ou les amène à tuer leur fils. » Electre, Œdipe, Ajax : « chacun est mis devant son aveuglement qui lui révèle qui il est. Cette expérience de l'instant de la révélation est pour moi l'expérience la plus profonde qui puisse être. » p. 40.

(7) Racine, *Principes de la Tragédie*, en marge de la Poétique d'Aristote, texte établi et commenté par Eugène Vinaver, Paris, Nizet, 1978, p.50, p.20 : « [ils] ignorent ce qu'ils veulent faire », p.21 « il vient à reconnaître ce qu'il a fait » .

## 系譜の謎

さて、ムアワッドの戯曲の謎解きの展開にもどろう。

すでに「エメの脳」の幕から、上記のように16歳になったルーは4年前に亡くなった母親に託された願いを実現すべく、母親と自分の出自、家系を辿っていく旅に出る。エメは自分の脳に宿る胎児と隣り合わせに埋葬してほしいとも言い残し、遺体はすべてが明らかになるまで、すでに4年間、遺体安置所に置かれたままである。親の埋葬へのこだわり、真実が明かされて初めて埋葬を許されるというのは、ムアワッドの *Littoral*『沿岸 リトラル』や *Incendies*『炎 アンサンディ』に共通したテーマである。エメの脳のもうひとつの謎は、癲癇の発作のたびに第一次大戦の兵士ルシアン・ブロンデルの幻覚を見ることである。ナイフを持っている脱走兵で、彼女のほうへやってきたり、ほかの人物と格闘していたりする。最後にルシアンは兄弟のルイを殺し、川に飛び込む。このエメの脳に浮かぶ映像、そして脳内に発見された腫瘍が取り巻く骨、エメの母親リュス Luce の出自、これらの謎をルーはこの戯曲をとおして解明していくことになる。

次の幕「レオニーの血」から先、遠く第一次大戦に遡ってエメやルーの先祖とおぼしき人たちの話が始まる。ここで戯曲のすべてを振り返ることはできないが、ルーの家系図の断片だけを辿ってみよう。

第2部の「レオニーの血」は母親の幻覚に出てくるルシアンがある姉妹に助けられ、戦争から、塹壕戦から逃げてきたと説明する。辿りついたところは森の奥。そこに姉妹たちは動物園の動物とともに住んでいる。その姉妹のひとり、レオニー Léonie とルシアン Lucien はやがて恋をし、生まれた娘を Ludivine (Lux divine) リュディヴィヌと名づける。

第3部「リュスの顎」では、ルーは自分に課せられた任務に苛立ちながら、母エメの母親リュスに会いに行く。ルーはケバック訛りで祖母に食ってかかるようにして問いつめていく。これに対し、祖母もそっけない。ルーは、祖母は母エメを置き去りにしたと思っている。だが、祖母は話しているうちに自分のことを打ち明けるようになる。祖母は第二次大戦後のまだ幼いころに空軍のパイロットによってカナダへ連れてこられ、ケバックの夫婦に預けられた。田舎の粗野な人たちで、12歳のときに歯痛をいっきに解決するためにと歯をすべて抜かれてしまった。その苦痛が大きな心の傷になっている。養父はそれでも亡くなる前に実の母親の名前を教えてくれた。それが Ludivine Brouillard、リュディヴィヌだった。リュスはその母親が迎えに来てくれると一心に信じて待っているうちに酒に溺れ、生まれた子も取り上げられた。ある日、泥酔していると Sarah Cohen サラ・コエンという女性が介抱してくれる。その女性はリュディヴィヌとレジスタンスでいっしょに戦ったと語り、写真を見せてくれた。そして父親のサミュエルもリュディヴィヌも収容所に連行され、殺されていたことを告げられる。

戯曲はさらにリュディヴィヌの系譜をさかのぼる。1872年の普仏戦争後にアルザスで経営する製鉄所を守るためにドイツ国籍を取得する曾祖父アレクサンドルとその資本家の論理に反発した息子アルベールの確執。アルベールは家を出て、森の奥の動物園を世間の喧騒から逃れられる楽園として築く。そしてやがて妻の連れ子エレヌがじつは父アレクサンドルの子だと知らずに、エレヌ

と近親相関的な関係を持つ。生まれた双子のひとりがレオニー、リュディヴィヌの母親だったのである。

この展開はラシーヌの時代の *unité d'action* 筋の統一とはほど遠い、ブレヒト的な複層性を持っている。ルーはつねに古生物学者ドゥグラス・デュボンテルとともに各場面に登場し、過去のいろいろな痕跡を掘り起こしていく。そしてそれと前後して過去の人物たちの場面が並行して展開する。

6幕目の「リュディヴィヌの性」の直前に、リュディヴィヌはじつは子を産めない身体だったということが資料から明らかになる。ではリュスの母親はいったいだれなのか。

6幕目にはレジスタンスの地下組織レゾー・シゴニュ「コウノトリ組織網」の面々が出てくる。ダンサーのダミアンとサミュエルは美術学校生のサラやリュディヴィヌと仲良くなる。だが、ダミアンが占領軍に殺される。仲間は彼がレジスタンスの一員であったことを初めて知る。衝撃を受け、みんなでレジスタンスに身を投じていく。サラはやがてサミュエルの子を身ごもり、出産する。リュディヴィヌは子供を保護するため、かくまっていたアメリカ人のパイロットに幼児を託してスペインに逃す。そしてある日、ナチスが彼らの居場所をかぎつけると、リュディヴィヌはユダヤ人のサラと身分証を交換する。すべてを分かち合ってきたのだから、母であるサラに自分の代わりに生きてほしいと懇願する。

舞台は再びサラが泥酔しているリュスを介抱し、リュスが母親と思い込んでいるリュディヴィヌが収容所で亡くなったことを告げる3幕目の場面を繰り返す。サラは自分が母親であったことを告げずに、そのままそと去る。

『イフィジェニー』ではラシーヌは独自の発想で最後の場面でイフィジェニーを供儀から救う。エウリピデスのように女神がイフィジェニーをさらって代わりに雌ジカを生贄に供するのと異なって、司祭のカルシャスは神託が生贄に望んだのはもうひとりのイフィジェニーだったと告げる。戯曲のなかでアシルに恋し、イフィジェニーに嫉妬するエリフィルがじつはエレヌ（ヘレネ）がテゼー（テゼウス）にさらわれたときの子であり、イフィジェニーの名前で呼ばれたことを明かす。

クリテムネストルのせりふはしたがって、サラとリュディヴィヌのアイデンティティの入れ替えで、戯曲全体をつらぬく家族の系譜の探求が最後に大転換に遭遇することを暗示するものでもあったのだ。では、リュディヴィヌの系譜の探求は無意味だったのかという疑問が当然生じる。だがリュディヴィヌが母親であると固く信じて待っていたルーの祖母リュス、リュディヴィヌの父親だった第一次大戦の兵士リュシアンの幻覚を癲癇の発作のたびに見続けたルーの母親エメ、これらはやはり若いルーの生い立ちに重くのしかかってきた戦争がもたらした傷跡だったのである。たとえそれらが幻想にすぎなくても。普仏戦争から三つの戦争をまたぐリュディヴィヌの系譜は、個人の系譜としては幻影にすぎなかった。だが、普仏戦争、第一次大戦、第二次大戦は西欧、そして世界の人々が共有する過去の系譜であるとも言える。

この戯曲はその点、『炎 アンサンディ』のように全てがひとつの結末へと収斂されていくわけではなく、溢れ出るエネルギーでさまざまな話を織り交ぜながら、途中でカットした糸がはみ出したままとなっても、それも役者ととともに紡ぎ出した壮大な絵巻物の一環という荒削りのところも見え

る。たとえば、エメの癲癇の発作の度にでてくる「斜めの神託」。冒頭に引用した「父親はただひとり息子三人」はたしかにアレクサンドルにはアルベールという長男と、アルベールの妻になるオデットとの間にできたもう一人の息子がいるが、三人目が見当たらない。アルベールはオデットの娘、つまり本当は自分の妹エレーヌと娘を三人設けるが、ほかに娘三人がいる人物は見当たらない。「斜めの神託」は「予言」として機能するというより、エメの発作に、ギリシア悲劇にも似た近親者の悲劇や過去の三つの大戦へと戯曲を大きく転換させる軸点のような役割を付与していると言える。

### 心の和ぎ

11月9日にまだ胎児だったルーの鼓動が聞こえた日はベルリンの壁の崩壊の日、クリスタル・ナハトの記念日でもあった。パーティの参加者はこれでは生まれてくる子は悲劇役者になるしかない、クリテムネストルのようになると言っていた。ルーははたして、クリテムネストルに負けない気性の激しさをみせる。ケベックの方言で罵声の言葉を吐きながら、この探求を強いられていることに反発し、父親にも祖母にも、また同行してくれる古生物学者に対しても喧嘩腰である。真実を知ろうとするオイディプスの苛立ちに通じるものがある。だが、オイディプス同様、神託代わりの母親との約束だけでなく、彼女自身の内側から真実の探求へと駆り立てていくなにもものがある。そして彼女は徐々に周囲や自分との和解に向かっていく。途中から父親に優しい声をかけ、最後にようやく実現した母親エメの葬儀に、母と疎遠になっていた祖母リュスを招待する。探求をとおして孤独に育った母親の苦悩、養子として無残な目に遭い、実の母親を待ち続けた祖母リュスの心の痛み、実の曾祖母サラの無言の悲しみ、養子にされ子を産めなかったリュディヴィヌの犠牲、これらすべてを引き受けるのである。アトレウスの家系ほどではないにせよ、親子の確執、兄弟の殺し合い、無自覚の近親相関、とギリシア悲劇顔負けの系譜に、戦争がもたらす悲劇。ルーは最後は『コロノスのオイディプス』の主人公のように試練を乗り越えて心の穏やかさを獲得する。母親と心のなかで和解する。「母さん/母さんは世界を与えてくれた/世界は大きい/でも与えてくれようとしていた以上は/私もそれを受けとることにする！」<sup>(8)</sup>

母さん、  
私が属する時代の足どりが聞こえる  
そして仮に  
今日もなお  
大虐殺がすぐそばにあると感じられても、  
仮に戦争の不穏な喧騒を耳にしても、  
自分がルーで、この心が世紀を横断したことを知っている。

(8) 『森 フォレ』藤井慎太郎訳、pp. 134-135.

ルーもまた、自分が何者なのかを悟り、家族の確執や戦争に翻弄された幾多の女性の愛と苦悩のうえにここに立っていることを認知し、次に生まれてくる子を見捨てないと誓う。

この壮大な絵巻は、私たちすべてに、自分が気付かずに背負っている可能性のある家族の因縁や人間関係、歴史と戦争の傷跡について問うているように思う。ラシーヌもまた戦争の悲惨とその渦中であって近親者たちや恋人たちが繰り返す過ちの連鎖と悲劇を描いた。戦争の悲惨さが心に残す傷は文学的な伝統から受け継ぐものでもあったが、同時代に凄惨を極めたフロンドの乱を目撃したこともあり、その情景を詩にも書いている。戯曲でも繰り返し戦争の悲惨さと虚しさを描いている。21世紀の現在、戦争や紛争は今なお絶えるどころか、過去の戦乱を思わせる壮絶さをみせている。ムアウッドは戯曲を書くに当たって、憎悪について、深い怒りについて考察したかったと語っている。「兄弟の民族を憎悪にかき立てるのはなにか。」自分の演劇活動は中東の紛争に端を発した自分の経験になんらかの意味を見出そうとする試みだったことに気づかされた、と。この戯曲で舞台にしたかったのは、「すべてを打ち砕き、そのあとに人類を残らず引きずり込むあの車輪である」<sup>(9)</sup> と言っている。現在の戦争は私たちにどのような心の傷を残し、私たちはどのように対処していけばいいのだろうか。

---

(9) Wajdi Mouawad, *Le Sang des promesses*, Puzzle, racine et rhizomes, Actes Sud/Lemeac, 2009, p. 59.